



「定位反射」と「注意」の問題

何か突然に刺激を受けると脳が活性化されるといのが定位反射です。

このことについて前回触れましたが、何も、強い刺激で

プロジェクトK

vol.28

文責：荒木 秀夫
(徳島大学大学院教授)

問合せ先／スポーツ推進課 プロジェクトK・
スポーツ推進係…☎ 57 - 4850

ロフが述べているところだす。同じような指摘は多くの学者も指摘しています。

つまり環境からの刺激の強さ、大きさだけに応じて反応の強さが決まるわけではなく、その刺激が弱くても、どんな意味があるのかということが大きく関係していることになります。その「刺激の意味」とは何かを考えてみましょう。

当然、刺激が加わる前に、必要な刺激、重要な刺激とは何かが決められていることになることは想像できるでしょう。何か心配なこと、気になること、または探し求めていることなどの心理的なことから始まり、スポーツなどで素早く反応しようとする瞬間的なことなど、特定の刺激に対して何かを準備している状態にあることが前提となります。簡単に言うと、今、必要な情報は何かということだす。

そうするとその情報が得られれば、それに向けて、あらかじめ行おうとしている反応を引き起こすことになるわけです。一見すると効率の良い、合理的な反応ができると思いがちですが、必ずしもそうと

は限りません。

なぜならば、注意を向けた刺激以外に対しての見落としが起きるからです。

注意を向ける対象は、一つのことに對して、または全般に對してと、いろいろな範囲に別れます。自動車を運転している場合は、当然、全般に注意を向けることになるでしょう。前方だけを注意していても安全な運転はできません。

しかし、運転に関係すること以外に對しては注意を向ける必要はないことになります。これも時々思わずやってしまうことがありますね。例えば、道を探しながら運転している時などです。事故にもつながりかねません。結局、何かに注意を向けるというのは、ごく小さなことだけに注



意を向ける場合でも、広く全般に注意を向ける場合でも、特定の範囲内、つまり何らかの枠の中で行っているということになります。自動車の運転については、運転そのものに関係しているすべてが、その枠に相当します。

すると、ここで、二つの重要なことが指摘できます。

一つは、その枠をどの範囲で定めるのかということと、その枠をどの方向に向けるのかということだす。これらを決めるのは、何をしようとしているのかという「行動」と「反応」、つまり「運動内容」です。まさに、コオーディネーション能力としての「定位反応」の重要な点です。

今回は、いよいよ感覚運動統合という面からこのことに触れてみたいと思います。